View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by GLIM IR Institution Repository

ムシロの「予想意外性」について

申　　在　景

論文要旨

陳述副詞の中でも比較の意味をもつものにムシロ・カエッテ・イッソがある。この３語の中で、比較される物事の価値・状況・能力・範囲・程度の差を最も幅広く対比しうる副詞が、ムシロである。このムシロについて、従来の研究や辞典では、「ムシロの意味は比較・選択・評価・判断の４つである」と説明されているが、これを越える説明はほとんどない。

ムシロで対比されている比較項Ａと比較項Ｂとの意味関係に注目し、選択される比較項Ｂや比較項Ａや前提条件などが、どのような情報として対比されているかを検討した。さらに、従来から予想に反する結果を導く意味があるとされているカエッテ・イッソなどと比較すると、カエッテ・イッソと同様にムシロにも「予想に反する結果を表す」という「予想意外性」があることが確認することができた。また、ムシロの使われた文には比較項Ａと比較項Ｂの意味関係において「一般常識、共通認識、前提」のようなものが必ず存在し、それらが「**予想意外性**」を生んでいると解釈された。

本稿では、考察を通して、ムシロの意味として「比較・選択・評価・判断」の４つのほか、「**予想意外性**」を考慮すべきことを主張する。

キーワード【予想意外性、一般常識、共通認識、比較範囲の広狭、予測可能性】

1. はじめに

陳述副詞の中に、比較・選択・評価・判断を表す副詞ムシロ・カエッテ・イッソなどがある。この中で、比較される価値・状況・能力・範囲・程度の差を最も幅広く設定しうるのが、ムシロである。従来の研究や辞典では、ムシロの意味は「比較・選択・評価・判断の４つである」と説明されることがほとんどである。

しかし、本稿執筆者はムシロの意味として「比較・選択・評価・判断」の４つとは別に、まず「予想意外性」を考慮すべきだと考える。ムシロは、予想外の度合いによって、微妙な相違を表現するドチラカトイエバによる対比から、カエッテ・イッソが使われるマイナスイメージあるいはプラスイメージなどの正反対の対比表現まで、幅広く表現することが可能である。

また、ムシロのない文でも「比較・選択・評価・判断」の意味が含まれる場合があるが、

ムシロが入った場合には、それとはまた異なった対比を含意して使われていることが見えてくる。

本稿では、ムシロの媒介する比較項Ａと比較項Ｂの意味関係に注目し、カエッテ・イッソなどと比較しながら、本稿執筆者の注目する「予想意外性」を検証してみたい。また、ムシロを入れることである種の「前提」が生じてくる現象が確認できるが、それはムシロを使うことで新たに作り出されるという、ムシロの特徴的働きを指摘してみたい。つまり、「前提」がムシロによって作り出されていることであることを例文でみてみたい。

なお、本稿での「予想意外性」とは、一般常識[1)]、あるいは、対話者との文脈上において共有される価値判断基準（共通認識[2)]）から予想される結果と食い違うという特性を指すことにする。また、対比されている事柄を、比較項（Ａ・Ｂ）と呼び、ムシロによって選択される方を比較項Ｂとする。

2. 辞典の記述

2.1　主要な国語辞典

ムシロの意味は、主要な国語辞典では次のように簡略に記載されている（例文略、下線は、以降の記述も含め引用者による）。

①それよりこれを選ぶ、そういうよりこう言った方がいい、の意を表す語。いっそ。どちらかと言えば。　『岩波国語辞典[3)]』

②㊀どちらか一方にどうしても決めなければならない場合に、悩んだ末の選択としてその方を選ぶという判断を表す。

㊁どちらかと言えば以下に述べる方がより適切だとする判断を表す。

『新明解国語辞典[4)]』

③二つの物事をくらべ合わせ、あれよりこの方を選ぶという意を表す。

『大辞林[5)]』

④事柄、事態の選択を示し、多くあれよりもこれを選ぶという気持を表わす語。どちらかといえば。いっそ。（＊引用者注：「多くの場合あれよりも～」か）

『日本国語大辞典[6)]』

国語辞典の簡略な記載ではあるが、そこには、次のような共通点がある。

ア　選択の機能を持つ副詞

イ　２者から１つを選択する（②の㊁のみ、二者択一というより多者択一とも取れる解釈を挙げる）

ウ　選択の意味以外に、「より適切だ」「いい」という評価的判断の意味を別に指摘する辞典もある（新明解、岩波）

エ　類語として「いっそ」「どちらかと言えば」を指摘するが、相違についての説明はない。

なお、『新明解』だけは意味を２つに分けているのが特徴である。その㊀は他の辞典と同じ二者択一的「選択」の用法の説明となっている。一方、㊁としては、「より適切だ」という判断の意味になるのは二者択一ではなく（多者からの）択一の場合に、評価判断の用法になる（限られる）としているようである。用法と意味とが連動し区別されることを指摘したものと受け取れる。独特の解釈であるが、この相違が実際に確認できるかどうかも課題となる。なお、本稿執筆者が上記の国語辞典の記述を踏まえて、比較項Ａ・比較項Ｂの間にムシロのある文とない文とを比較して見た場合、辞典の解釈以上の相違があるように感じられる（後述）。

上記の指摘は、より詳しい解説がある類語辞典類とも重複しているので、次の 2.2 でそちらと併せて検討することとする。

2.2 『表現類語辞典』

『表現類語辞典[7]』でも、次のように、ムシロを比較・選択ととらえ、良し悪しを判断するものと説明している。

・むしろ

二つのものを比較して、どちらか一方を選ぶ場合に使う語。どちらかといえば。いっそ。「却って」は、自分の予想に反して、よい（悪い）結果が生じることを言うが、「むしろ」は、前に述べることよりも後に述べることの方を、自分自身がよい（悪い）と思う場合に使う。

（『表現類語辞典』p.214）

2.3 『類語例解辞典』

『類語例解辞典[8]』では、「二つ以上」を比較して１つを選択するとする。

・むしろ・かえって・いっそ

共通する意味：二つ以上の事柄を比較して、どちらかを選ぶ気持ちを表す語。

＜使い方の例＞

「むしろ」その服には青より**むしろ**茶の靴が似合う。

「かえって」説明を聞いたら**かえって**わからなくなった。

「いっそ」団体でぞろぞろ歩くくらいなら**いっそ**旅行はやめにしよう。

（『類語例解辞典』p.1010）

この『類語例解辞典』の３つの例文をもとに、類義語とされているムシロ・カエッテ・イッ

ソの置き換えを表にしてみると＜表１＞のようである。比較項Ａ・比較項Ｂの意味関係（価値・状況・能力・範囲・程度の差）に関わらずムシロはいずれの場合にも広く使うことが出来ることがわかる。

＜表１＞

	説明を聞いたら～分からなくなった。	ぞろぞろ歩くくらいなら～旅行はやめにしよう。	青より～茶の靴（の方）が似合う。	＊説明を聞いているうちに～行かない方が良かったかと思うようになった。
ムシロ	○	○	○	○
カエッテ	○	―	―	○
イッソ	―	○	―	○

2.4 『現代副詞用法辞典[9)]』

「**むしろ**」［**寧ろ**］（p.525）（比較項＝前件・後件＝に点線を付した）

①あの大臣は政治家というよりは**むしろ**政治屋だ。

②美佐子は家で猫を十五匹飼っている。というより**むしろ**猫の家に美佐子が居候しているようなものだ。

③あんな奴と仲直りするくらいな**らむしろ**死んだほうがました。

④六月は梅雨で最高気温が上がらず、湿度だけからいえば**むしろ**五月のほうが暑いくらいだ。

⑤「この洋服どう？　胸にブローチでもつけようかしら」
「いや、**むしろ**何もないほうがいいね」

⑥休みの日は**むしろ**家でゆっくりしたい。

⑦（一極集中論議）国会なんかが**むしろ**地方に行ったほうが、**むしろ**実際の効果は大きいんじゃないかなんて、**むしろ**そう思うんですよ。

前件と後件を比較して後件を選択する様子を表す。プラスマイナスのイメージはない。判断を表す述語にかかる修飾語として用いられる。①②は「□□というより（は）むしろ△△だ」の形で□□と△△を比較して△△を選択する様子を表す。③は「□□するくらいなら死んだほうがましだ」の形で、「死ぬ」という最悪の結果のほうがまだ好ましいという判断を表し、結果として絶対に□□したくないという話者の意志を表す。⑤は相手の判断を前件とし、それを否定して自分の判断を述べる場合である。正面から反対するのではなく選択肢として自分の意見を述べるニュアンスで、冷静さの暗示がある。⑥は前件（外出すること）を省略する場合である。⑦日常会話で間投詞として用いられる現代語用法。

さまざまの対象を比較して判断を下している話者の冷静さと客観的な態度、さらに独断を下して人間関係が孤立することへの恐れが暗示されている。

「むしろ」は「かえって」や「いっそ」に似ているが、「かえって」は予想される結果に反する結果になるというニュアンスで、選択の暗示はない。「いっそ」はあえて極端な状況を選択するというニュアンスがある。

（『現代副詞用法辞典』p.526）

⑦の「現代語用法」とするものを除けば[10]、他の辞典と同様、比較項Aと比較項Bを比較して比較項Bを選択し、話者の意志ないし判断を表す副詞であると説明している（⑦の用法のみに多者択一の場合（「さまざまの対象」）があると解しているようにも受け取れる）。

なお、ムシロの項目では、「予想意外性」への言及はないが、カエッテの項目において「ムシロは、予想に反する結果になる暗示はない。」と明記されている点は注目しておきたい。本論では後述のようにムシロにも「予想意外性」があると解釈する。

2.5　砂川有里子ほか（1998）『日本語文型辞典』

『日本語文型辞典[11]』では、一部ながら文型による用法の解説もなされている。

（★抜出は、本文原文と同じにする。）

むしろ

1. 二つのものを比較して、どちらかといえば一方の方がより程度が高いという意味を表す。

   ①じゃましようと思っているわけではない。**むしろ**君たちに協力したいと思っているのだ。

   ②A：総選挙からこっち、景気はよくなりましたか。

   B：そうですね。**むしろ**前より悪くなったんじゃないですか。

   ③景気はよくなるどころか、**むしろ**悪くなってきている。

2. Xより（も）むしろY

   ①Yの方が程度が高い

   ②一般に考えられるのとは逆に

   「XよりもむしろY」の形で使われて、どちらかと言えばYの方が程度が高いことを表す。

   ①お盆のこむ時期には、旅行なんかするよりも、**むしろ**家でゆっくりしたい。

   ②大都会よりも**むしろ**地方の中・小都市で働きたいと考える人が増えてきている。

   ①、②のように、単に比較するだけで話し手の価値判断が含まれて、「二つのもののうちひとつを選ぶなら、どちらかと言えば後者がよい」という意味を表すことが多

い。この場合には、後に、「…するほうがよい」「…したい」「Nがいい／よい」など、話し手の好みや意向を表す表現がくる。

③円高のせいで、国内旅行よりも**むしろ**海外へ行く方が安くつくという逆転現象が起こっている。

④この点については教師よりも**むしろ**学生の方がよく知っている。

③、④の例は、「一般に考えられるのとは逆に」「期待していたこととは逆に」という含みがあり、「かえって」［逆に］「反対に」などでいいかえることができる。

3. V-るぐらいならむしろ

①行きたくない大学に無理をしていくぐらいなら、**むしろ**働きたいと思っている。

②こんなに金利の安い時に貯金なんかするぐらいなら、**むしろ**海外旅行にでも行った方がいい。

③あんな奴に援助を受けるぐらいなら、**むしろ**死を選ぶ。

4. …というよりむしろ…だ

①あの人は天才というより、**むしろ**努力の人です。

②今回の出来事は、事故というより**むしろ**人災だ。

③女は美女と言うより**むしろ**可愛いという感じだ。

あることがらについての表現や判断の仕方を比較するのに用いる。「Xという言い方、見方もできるが、比較すればYという言い方、見方の方が妥当だ」という意味。

（『日本語文型辞典』p.567-568）

この『日本語文型辞典』では、ムシロの意味を文型によって細かく分け、それに当たる例文をあげているのだが、説明と例文とが必ずしも一致していない。例えば、「1　むしろ」は「一方の方がより程度が高い」として説明しているが、例文は「逆に・反対に」という意味の方がより適切に見え、「2」の（3）（4）との相違が問題となる。文型で整理しようという試みは評価されるが、細部での整理がまだ必要である。

これら類語辞典・用例辞典では、類語との比較や様々な文型例があるなど、先の国語辞典より詳しい解説がある。国語辞典とほぼ共通している内容は略し、注目される指摘をそれぞれから箇条書きに抜き出しておく。

ア　プラスマイナスのイメージはない『現代副詞用法辞典』

イ　予想に反する結果になる暗示はない『現代副詞用法辞典』

ウ　「自分の予想に反して」というのは「むしろ」にはなく、「かえって」の方にある『表現類語辞典』

エ　（二者択一とする『表現類語辞典』と二者以上とする『類語例解辞典』があるが、そ

れとは別に）『現代副詞用法辞典』では、「さまざまの対象を比較」（多者）する場合の意味としては「判断を下（す）」を挙げ、二者択一における選択とは区別している。（この区別は、国語辞典でみた『新明解』が、㊁として区別していたのと同様の解釈と言えるものであり、注目される。）

3. 先行研究論文

3.1　市川孝（1976）『文法―岩波講座　日本語 6』

市川孝（1976）[12] は、「むしろ、まして、たとえば」などの副詞の特徴を、「文中のいろいろな個所に用いられて、なんらかの対象を取り上げることによって、それ以下の叙述を誘導するが、その意味するところは必ずしも評価ではなく、また、述語の形にいいかえることもできない」と述べる。また、渡辺実の限定副詞の定義【引用者注：渡辺実（1957）】「ある語の表す素材概念を限定し、その素材に対する話し手の価値評価を表す一群である」を踏まえ、市川は「限定の副詞」と名称し、その１つとしてムシロを挙げている（渡辺は別の論『国語構文論』では「誘導副詞」とする）。（なお、工藤浩（1977）でムシロを「限定の副詞」として取り上げている。）

3.2　森田良行（1977）『基礎日本語辞典 1』「むしろ」「かえって」

森田（1977）[13] では、「ほぼ同じ程度の状況にあるＡ・Ｂ二つの事物・事態のうち、どちらかといえばＡよりＢ（あるいはＢよりＡ）のほうが、この場合、より適切であるという判断をする時に用いる。Ａ・Ｂがプラスとマイナスの関係のように、極度に異なる程度や状況にある場合には、使うことはできない。「七月より**むしろ**一月のほうが寒い」とは言えない」（p.435）とする。

また、「むしろ」には２つの発想があり、１つは、「Ａを否定し、Ｂを適切なものとして選び取る」、もう１つは「ＡよりはＢのほうがより適切であるとして、Ｂを選び取る」であるという。例「この悪天候では、進むよりも**むしろ／かえって**とどまるべきだ」。前者は、Ａを退ける点ではカエッテの用法と共通するが、後者ではＡを否定していないのでカエッテに言い換えられないとする。また、この２つの用法とも、比較項Ａ（前件）と比較項Ｂ（後件）の関係という点では違いはなく、ＡよりはＢを選ぶ点では共通し、Ａ・Ｂの関係は内容上理解がつくので、ムシロを使わなくても文意は通じるとする。例「天才というよりは（むしろ）気違いだ」

ムシロの２つの用法と、カエッテと交換可能な場合の意味をおそらくはじめて指摘している点が注目される。

3.3　工藤浩（1977）「限定副詞の機能」（比較選択）

工藤浩（1977）[14] は、限定副詞の種類の１つとして「比較選択」を挙げムシロ・ドチラカトイエバ・イッソについて「他の対照的な語句と比較して、それヨリこちらノホウガと、対象の語句をあえて二者択一的に選びとることを表すものである」と分類している（p.977-978）。

「F　比較選択―むしろ・どちらかといえば・いっそ

（33）仕事は、才能より**むしろ**忍耐力で進めて行くものでね。

（34）思想は貧困であるどころか、**むしろ**過剰の状態にある。」

これらは、他の対照的な語句と比較して、それヨリこちらノホウガと、対象の語句をあえて二者択一的に選びとることを表すものである。（33）のムシロの例では、「才能」と比較して「忍耐力」が選び取られている。

イッソ（例（37）（38）略）も同様だが、それだけでなく述語のムード（法）にも関係をもち、述語のムードはおおむね意志（―ウ）・希望（―タイ）・命令や、適当（―タライイ etc.）など、実現を期待するものに限られていて、陳述副詞としての性格をあわせもつ、とする。

3.4　長田久男（1983）「注釈の誘導副詞『むしろ』の意義記述」

長田久男（1983）[15] は、「誘導副詞は、誘導という関係構成の職能を持つ副詞である。『むしろ』も注釈の誘導副詞である。」と述べてムシロの例を挙げ説明している。

1. ・Aという「基準」に対して（あるいは、基準にくらべて）
   ・Bという「誘導対象」が、
   ・Xという位置にあることを示す。
2. 「基準A」と「むしろ」との間に出現している「関係を示唆する表現」は、「むしろ」を媒介とした「基準A」と「誘導対象B」との関係を示す言葉であるということである。

――（長田 1983：795）

以上1、2に該当する文型として次の８つを挙げている。

・Aというよりはむしろ B／Aというよりもむしろ B／Aよりもむしろ B／A却ってむしろ B、／Aというかむしろ B／Aどころかむしろ B／Aそればかりかむしろ B／Aいや　むしろ B、

――（長田 1983：800）

ムシロには、評価をするには必ず比較の基準があり、AとBの関係を示唆する上記のような表現が重要な指標になるという。具体的には次のように説明されている。

・広明は登美子に似ているというよりは、**むしろ**啓明に似ている。

――（長田 1983：798 －例 1）

→比較基準が「登美子（に似ている）」で、誘導対象が「啓明に似ている」

ムシロで「（比較の）基準Ａ」「むしろ」「誘導対象Ｂ」の三者が記されている文を調べると誘導対象との間に関係を示唆する表現が入る（例えば、「というよりは」「というよりも」など）。また、比較の基準が一文の中に表現されていないムシロ文では、誘導対象から基準（のおおよその意味範囲）を推定することができると述べ、次の例文を挙げている。

・（彼女を悪人と思ったことはなかった。）いや、**むしろ**人並みよりも内気な女と思っていた。　――（長田 1983：801 －例 14）

→ムシロによって誘導対象（人並みよりも内気）とは反対の「内気で何もできない人とは真逆のタイプ」（ここでは実際は「悪人」）が示唆される。

長田氏は、誘導対象はどちらかと言えば是認されるべき対象と説明している。

3.5　池谷清美（1988）「『かえって』の意味について」

池谷清美（1988）[16] は、「Ｘは　Ｙより　**かえって**　Ａだ。」の文型では、多くの例文が「むしろ」と置き換え可能だが、その意味が異なるとする。

・渋滞の時は車より歩く方が**かえって／むしろ**早い。

カエッテは、「車は歩くより早いという予想があり、その予想とは逆に歩く方が早いということ」を言う。ムシロでは、「単に２者を比較し判断を下している」と述べるだけであるから、カエッテのような“予想”と異なるという意味は認めていないことがわかる。

3.6　国立国語研究所（中道真木男）（1991）『副詞の意味と用法』大蔵省印刷局（p.147）

『副詞の意味と用法 [17]』（(1991)（執筆担当：中道真木男）では、他の語との意味的相違は検討されておらず、構文的相違によって用法を分類した後に、「基本的な意味として、ある比較の対象よりも、ほかの意外なもの、またはそれまで問題にされていなかったものを選択することを表す。」との解釈を記している。構文的には、①比較の上で、排除される対象を明示する用法、②同じく明示しない用法、③比較の意味は薄く意外と思われる主張を行うのに用いる用法、の３つに分けているが、各区分は連続的でありはっきりとした境界を引くことは困難であるという。そして、比較・選択の対象については、他の研究同様に、文中に明示されるか、含意されるとする。

「ほかの意外なもの」を選択する機能があるとするこの解釈は、管見の限りでは中道が最初と思われる。その点で、本稿で主張するムシロの「予想意外性」を最初に指摘した論として注目されるが、「意外性」が付与されていることの論証や例示を具体的に行っていない。これ以前にそのような解釈がないので、その「意外性」というものがどのような表現で実際に生じていると見ているのか未詳というほかない。その後の研究でも、予想外はカエッテにはあるがムシロにはないとする説や、ムシロの辞書記述や前後の先行研究でも「予想外」が

指摘されていないこと、などを見ても、評価されなかったか、十分な論証をもつ解釈とは受け取られてきていない、と考えられる。

本稿の主眼は、ムシロのもつこの「予想意外性」を改めて、用例の検討によって実証しようとするところにある。（なお、後述するように、安部朋世（2011）や趙愛淑（2011）で先行研究での定説のように記している“予想外”という特性に関する記述部分は、この国語研究所（1991）の中道解釈を踏襲したのかとも思われたが、二者とも中道の論への言及もなく参考文献にもない。この中道解釈とは無関係と考えざるを得ない。また、予想外という見方が定説となっていることを示すものも見出せない。それゆえ、この「国研（1991）中道解釈」を再評価するところにも、本論の研究史上の意義がある。）

3.7　日本語教育　誤用例研究会（丸岡・福島）（1997）『類似表現の使い分けと指導法』

『類似表現の使い分けと指導法[18]』では、ムシロは、他の判断の存在を認めた上で、それよりもより妥当なものとして自分の判断を持ち出すときに用いられ、ドチラカトイエバというような、聞き手に対する話し手の配慮が感じられて、これがムシロのもつ効果であると述べている（「(6) この悪天候では、進むよりもむしろとどまるべきだ」など）。また、「［X］より、むしろ［Y］」においては、［X］と［Y］は、どこかに別の面をもった事柄であり、［X］は、それ以前に存在する考え方、たとえば聞き手もしくは第三者の考え方または社会通念などを内容とし、［Y］は、それよりもより妥当なものとして、話し手の意見・気持ち・好みなどによって選ばれたものが内容となると説明している。さらに、このとき、他者の判断を正面から否定することもなく、反対意見にも配慮した主張になる。また、論理的もしくは冷静に検討したものであるという印象を聞き手に与えるための表現であると説明して、その部分がカエッテと違うところであると述べている。この研究はムシロとカエッテとの違いを分かりやすく説明し、本稿でもこの内容に踏まえ、さらに展開していきたい。

3.8　安部朋世（2011）

安部朋世[19]（2011）は、「比較選択」のとりたて副詞に分類されるムシロ・ドチラカトイエバ、そしてムシロと意味的に類似するカエッテについて、「とりたて」の機能の有無の観点から共通点と相違点を述べている。

まず、ムシロとドチラカトイエバの相違は、とりたての＜前提集合＞のあり方が異なるという。安部は、とりたてられる要素を＜当該要素＞、当該要素と共通する前提を有し対比的な関係にある要素を＜他の要素＞とし、前提集合は、それら当該要素と他の要素から成る集合のこととしている。ムシロは、「＜前提集合＞の要素が「前提を満たす要素として想定されやすいか否か」という価値判断を有する要素として設定され、その中の「想定されにくい要素」がとりたてられるのに対し、ドチラカトイエバは、ムシロのように＜前提集合＞内の

要素について「想定されやすいか否か」という価値判断は含まれず、＜2要素がニュートラルな関係で提示されている＞といえると述べている（安部 2011：p.243左）。この、ムシロとドチラカトイエバとにおける相違点（想定されやすさ度の相違という着眼点）は興味深い。

また、ムシロとカエッテでは、先行研究でのいくつかの解釈――ムシロが二つ以上の複数の中の一つをより適切だと判断する場合に用い、カエッテは予想される結果とは逆の事態が生じる場合に用いる――を肯定しつつ、カエッテが、ムシロ・ドチラカトイエバのように、「取り立て用法」を有することを指摘する。また、「ムシロでは先行文脈に現れる要素が『否定される要素』として想定されている」（p.243左）、「ムシロは（略）その中の『想定されにくい要素』がとりたてられる」（p.243左）とする。

なお、本稿の主張と関わる点で注意されるのは、次の先行研究のまとめた部分である。

> 先行研究では、ムシロ・ドチラカトイエバ・カエッテは、「二者択一」や「複数の中からの選択」、「予想される事態を否定して別の事態だと述べる」等と説明されるが、これらは、＜それぞれの語で示される要素以外の要素が存在する＞とまとめることができる。（p.242右「ムシロ・ドチラカトイエバ・カエッテの分析」の節）。

先行研究の内容をまとめた記述部分において、この「予想される事態を否定して別の事態だと述べる」副詞群と紹介している箇所が注目される。

しかし、この「先行研究」についてはまったく注記がないため、どのような先行研究を根拠としているか未詳である（そのような「予想とは反対」という意味はカエッテの方に多く指摘されている）。

3.9 趙愛淑（2011）－「韓日語副詞『むしろ』와『오히려』의 意味研究」

趙愛淑（2011）[20] は、「ムシロ」と韓国語の「오히려」を意味を比較している。

まず、比較表現（「～のほう」「～より」等）との関わりについて、従来の研究で指摘されてきた比較表現との共起現象は、必須的ではなく任意的であることを明らかにした。また、「～より」を伴って現れる場合の様相は、従来の記述では充分でなく、そのタイプが7つあるとする。さらに、「ムシロ／오히려」の位置が比較的自由であるため、それがとりたてる要素（比較項B）の範囲は、「ムシロ／오히려」の後にあるとは限らず、文脈によって変わることを指摘する。

また、「ムシロ／오히려」の現れる位置と比較項との位置関係は、必ずしも一義的に決まるものではないこと、また、ムシロに見られる他者の排除に関する排他性が2つに分けられること、を指摘する。

なお、「ムシロ」と「오히려」の共通点として先行研究を次のようにまとめている。

> 종래 선행연구에서 언급된「むしろ」와「오히려」에 관한 기술 및 제시된 예문을 살펴보면 다음과 같은 공통점과 차이점을 확인할 수 있다.

（中略）

c.「むしろ／오히려」모두 선택된 요소（B）는 予想과는 다른 결과이다 .（p.266）

（訳）従来の先行研究で言及されている「むしろ」と「오히려」に関する記述及び提示されている例文を調べてみると、次のような共通点と相違点が確認できる。

（中略）

c.「むしろ／오히려」両方とも選択された要素（B）は、予想とは違う結果である。

c の部分に共通点として「予想とは違う結果」と記されている（p.266）。この表現は、本稿で問題とする「予想意外性」とも関係する解釈となるが、この記述の典拠となっている先行研究についてはまったく注記がないため、論拠が未詳である（あるいは、韓国語の「오히려」も同様にそのような意味が持っているとするので、趙（2011）の言及は「오히려」に関する韓国における研究での指摘を紹介したものか）。

なお、庄鳳英（2000）[21]「『むしろ』、『かえって』和『いっそ』之异同」がムシロ、カエッテ、イッソを解説しているが、森田良行（1977））の内容と多くの点で重複しているにも関わらず、参考文献として挙げるのみで関連性への断りもないのでここでは割愛する（用例もほぼ同じである）。

4. 先行研究への問題提起

4.1 辞典での記述に関して

辞典全般では、ムシロは比較・選択・評価・判断の意味を持つとのみ説明されており、比較項Aと比較項Bを比較して、話者は自分の考え・意見として、あえて比較項Bを選択するというニュアンスを持つと述べられている。

また、『副詞用法』（p.116）のカエッテの項目中に、「ムシロは前件と後件を比較して後件を選択するというニュアンスで、予想に反する結果になる暗示はない」とムシロの「予想意外性」に対する否定的説明がされている。しかし、一方で、国語研究所（中道）（1991）では、「ある比較の対象よりも、ほかの意外なもの、またはそれまで問題にされていなかったものを選択する」としていた。予想に反する結果になる暗示は含まないのか含むのか。ほとんどの辞典や論文ではこの部分が十分論証されていない。

・リンゴよりミカンのほうが**ムシロ**好きだ。

・3 月より**ムシロ** 4 月のほうが寒かった。

・あの人は教育者というより**ムシロ**学者だ。

本稿執筆者は、これらの例文はムシロを介在させることによって話者の選択が聞き手の予

想しているものとは違う、ということを暗示する効果があると考える。その点を詳しく論じる前に、先行研究論文でのこの問題を検討しておくことにする。

4.2　先行研究論文での解釈に関して

ムシロは、比較・選択の副詞とされる場合が多かった。一例として挙げれば、先に見た長田（1983）は、比較項Aという「比較基準」に対して、比較項Bという「誘導対象」が、Xという位置にあることを述べており、誘導対象はどちらかといえば是認されるべき（良いと評価される）と説明していた。つまり、ムシロは先行する比較項Aと比較項Bを必ず比較した上、比較項Bを選択して様々な評価・判断を下す副詞であるとされている。

用例＞それは暑い八月の半ば過ぎであった。ここに何十年ぶりとかの酷暑の年だった。病気の私は全く弱り切っていた。二日続きのジガ蜂の一挙一動を観察するのにさえも私はひどく疲れた。初夏の頃に私を喜ばせた彼らの活発な挙動も、今は**むしろ**煩わしく、うるさかった。（長田 1983：803）

上の用例＞は、（長田 p.803）でムシロの誘導対象としている「煩わしく、うるさかった」だが、比較基準の比較項Aは同一文脈上には対照的には明示されていないように見えるが、分脈から「（初夏の比に・私を喜ばせた）もの」と解釈でき、それがムシロ「今は・煩わしく、うるさく（なった）」と判断されていることがわかる。

一方、池谷（1988）では、カエッテのほうには予想とは逆・反対という意味があり（「その予想とは逆に歩く方が早いのだ」）（p.30）、ムシロには、「単に2者を比較し判断を下している」とあるだけで「意外性」は認めていない。

そして、安部朋世（2011）や趙愛淑（2011）で記している“予想外”という特性に関する先行研究をまとめた記述部分は、先行研究を博捜しても、結局その根拠は未詳であった。一方、「意外性」に初めて言及した国語研究所（1991）の中道の論は、その2者の参考文献には挙げられていないので、この中道解釈とは無関係と考えざるを得ない。この2名とも当然のように“予想外”という特性に言及している点は重要であり、中道解釈をここで改めて検討して、この特性の有無を検証することが必要と考える。

5. ムシロと前提の関係

これまでも見てきたように、ムシロは、基準となる比較項Aと、その基準の比較対象となる比較項B（2つ以上ある場合はそれら複数）を必ず比較している。この章では、ムシロの意味とムシロと前提との関係を見てみたい。

5.1　ムシロの意味分類

先に見てきた先行研究や辞書を踏まえ、ムシロの意味をまとめると、次のようである。

ア．AよりBが評価・度合・程度が上位である。

（例 1）ミカンよりリンゴが、私は**ムシロ**好きだ。

（例 2）赤ワインはスペインよりも**ムシロ**イタリアのものに高級品が多い。

イ．Aではなく逆にBである。

（例 3）この点については教師よりも**ムシロ**学生のほうがよく知っている。

（例 4）姉より妹が**ムシロ**大人だ。

ウ．AよりBが妥当だ・適当だと判断する。

（例 5）彼は教育者というより**ムシロ**学者だ。

（例 6）今回の出来事は、事故というより**ムシロ**人災だ。

（例 7）この悪天候では、進むよりも**ムシロ**とどまるべきだ。

エ．AよりBを、まだマシだとして選択する。

（例 8）あんな奴に援助を受けるぐらいなら、**ムシロ**死を選ぶ。

（例 9）行きたくない大学に無理をしていくぐらいなら、**ムシロ**就職した方が良い。

ア～エのように、ムシロは比較項Aと比較項Bを比較し、比較項Bを選択するが、このとき、比較項Aが表れている場合と表れていない場合があるが、表れていない場合は、比較項Bと全体の文脈で推定できる。

5.2　ムシロと前提

ムシロは、文中ないし文脈（以下、文脈上とする）に前提があるかないかで分けられる（これは、ムシロの予想意外性に繋がる）。下の例を比べてみると、ムシロが入った文には何らかの前提が含意されている。

（例 10）リンゴよりミカン。

（例 11）リンゴより**ムシロ**ミカン。（前提となっている何かに対してムシロで打ち消している）

しかし、文脈上にその前提が現れている場合もあれば、前提がない場合もある。

・文脈上に前提がある場合。

（例 12）私は（リンゴの産地の）青森県民ですが、リンゴより**ムシロ**ミカンのほうが好きです。

・文脈上に表現としては前提が必ずしも明示されていない場合。

（例 13）姉より（5 歳も年下なのに）妹のほうが大人だ。

⇒（年上の姉の方が大人であるという）表現としては文脈上に明示されていないが、一般常識・社会通念・共通認識がその前提の働きをしている。

つまり、ムシロは、文脈上に前提が現れなくても、ムシロをいうことで、一般常識・社会通念・共通認識などが含意されている（くる）ことを表す効果があることがわかる。

では、次の例ではどうであろうか。

（例 14）（一般の人が言う場合）リンゴより**ムシロ**ミカンが好きだ。

（例 15）（青森県出身者が言う場合）リンゴより**ムシロ**ミカンが好きだ。

例 14、例 15 とも、ムシロがあることで、「聞き手は別のことを（例えば、ミカンはあまり好きでないのでは？と）を思っているかもしれないが、自分はこうですよ」という意味が読み取れる。しかし、例 14 より例 15 の方が、より強く比較項Aを打ち消す印象が感じられる。例 15 の方が、選択している方（ミカン）と選択しなかった方（リンゴ）の予想・想定する印象とのギャップが強く感じられる（リンゴの名産地であり、新鮮で美味しい多様なリンゴをよく食べるだろうからきっとその魅力をよく知っていて好きに違いないという意味合いが、一般的な意味で含意されると考えられる）。言うなれば「予想外さ」と言えるだろうものである。この問題を次の章でより詳しくみたい。

6. 予想意外性をもつムシロ

ムシロは、比較項Aと比較項Bを比較し選択、評価・判断するという結果を導いているわけだが、5 章で分類したようにムシロで繋がれた比較項A・比較項Bには 4 つのパターンがあった。ムシロが予想意外性をもっているならば、聞き手、読み手には予め予想された答(考え）が存在していると言えるはずである。その答が予想される回答であると言える根拠は、それぞれの表現からどのように読み取ることができるか。ムシロが予想意外性を持つ事とその為の前提となる条件を調べてみたい。

本稿でいう「予想意外性」が生じる場合とは、次の 3 つに分類できると思われる。

1. 前提を必要としない場合（一般常識・共通認識が前提となる場合）――2「逆である」、4「選択する」意味の場合――

2. 前提を必要とする（一般常識・共通認識がなく、前提文によって前提が設定されている場合）――

3.（あえてムシロを使うことで）聞き手に意外感を持たせる場合――4「選択する」――

以下、この 3 つについてそれぞれ説明する。

6.1 前提（文脈上の前提文）を必要としない場合――一般常識が前提となり「予想意外性」が生じる場合――

比較項Aと比較項Bとで比較されている観点に関して、一般常識ないし共通認識によって、共通した前提（共有されている前提）がある場合の使用法である。その場合、その一般

常識・共通認識と異なる比較項（B）が時に選択されると、「一般常識・共通認識」とは「異なる」と理解されるために「予想意外性」を伴うことになる。

たとえば、次の例 16 のムシロがない表現は、普通は「姉の方が妹より大人」であると考えるから、通常一般的な表現としては不自然（？マーク付）となる。ムシロがない文は、例えば特定の姉妹への限定的表現でないと通常は使いにくい（○「あの姉妹は〜。」）。

（例 16）？姉より妹のほうが大人だ。

（例 16 − 1）姉より**ムシロ**妹のほうが大人だ。

ムシロだけを入れたかたちの例 16 − 1 は、ムシロによって、ここでは表現されていない一般常識（通常姉の方が大人である）を否定することを意味し、そこから常識や予想と異なるという「予想意外性」が生じている、と解釈できる。

このことは、反対の視点から見れば、ムシロを使うことによって、一般常識に反するという意外性が含意されるようになることを意味する。それゆえ、一般常識を表す表現にムシロがあるとそれに反する内容となってしまい、不自然になることになる。このような“ムシロと一般常識との関係”は、次のような例を見るとよくわかる。次の例が、何かの文脈がないかぎり不自然になるのは、ムシロによって打ち消される対象となるべき（一般常識という）前提がないからである。

？「姉の方が**ムシロ**妹より大人だ。」

例 16 のような場合は、「姉は一般に妹より大人であるものである」という一般常識が共通前提となっているので、文脈上、前提となる表現（内容）を必要としない。

このことは、例 17 でも同様である。

（例 17）3 月より**ムシロ** 4 月のほうが寒かった。

「3 月より 4 月のほうが温かくなっていることが多い」という一般常識とは異なって（ムシロ）、その予想・予期・予断に反して（予想外に＝予想意外性をもって）、「4 月の方が逆に寒かった」と述べている。ムシロには、このような働きがあるため、次の例 17 − 1 のようにムシロがない場合では、われわれは、そこに予想意外性を読み取ることはない。また、一般常識との比較という意味合いも感じることはない。単に、実際にあった事実を述べている表現と理解することになる。例 17 − 2 も否定される対象がないので、前記同様に不自然となる。

（例 17 − 1）3 月より 4 月のほうが寒かった。

（例 17 − 2）？ 1 月より**ムシロ** 2 月のほうが寒い。

このような例は、5 章でみた 4 つの用法と比較してみると、イの「逆である」「反対である」という意味合いで使われる場合に、もっとも顕著に表れていることがわかる。

6.2　前提（文脈上の前提文）を必要とする場合――一般常識・共通認識がない場合で「予想意外性」が現れる場合――

次の例 18 は、好悪の評価の上で、Ｂみかんが上位であるという単純な判断を示している。

（例 18）リンゴよりミカンのほうが好きだ。

比較項Ａ比較基準「リンゴ」は比較項Ｂ「ミカン」に対して、一般的に優位性を持たない。これが例えば、メロンとピーナッツのように、通常一般的にメロンを選ぶだろうというような相違があり、「ピーナッツより**メロン**のほうが好きだ」というなら、前提として差があることになろうが、そのような差がない場合は、例 18 は事実としての好き嫌いの記述を読み取るだけである。

（例 18 － 1）リンゴより**ムシロ**ミカンのほうが好きだ。

ところが、そこに例 18 － 1 のようにムシロが入ると、「リンゴ」の方が選択されてしかるべきであろうという何らかの前提ないし前文脈があることが示唆される。それをムシロによって打ち消して、予想されていない方のミカンを挙げている、と読み取れることになる。この会話を交わしている両者の間では、前提となっている内容に対して、話し手が「予想意外」の選択をくだしたということになる。そのことは、例えば次のような前提情報を付けてみると明確になる。

青森出身の人に「リンゴとミカンを比べたら、やっぱりおいしいリンゴがたくさん取れる名産地だから、リンゴのほうが好きなんじゃない？」と聞いた後に、その答えとして、回答された場合などである。

「(そう思うかもしれないけど）リンゴよりも、**ムシロ**ミカンのほうが好きなのよ。だって普段から身近にあって、食べあきてしまっているから〜〜。」

このように、単に、「リンゴよりミカンのほうが好きだ」と言う場合は両者を比較して好みを言ったに過ぎない。しかし、一般常識的前提がない比較項の場合に、ムシロが加わることによって、何らかの前提を踏まえた「予想意外性」が現れてくることがわかる。

6.3　比較項Ａと比較項Ｂの共通点が共通認識となっている場合――前提がある場合（他者の評価が前提となる場合）――

ムシロが「予想意外性」を持つために、前提を必要とする場合について見てみよう。

（例 19）あの人は教育者というより学者だ。

（例 19 － 1）あの人は教育者というより**ムシロ**学者だ。

例 19 では、教育者と言っても学者と言ってもどちらで良いような職業の人のことを述べていることが、この比較ではわかる。比較項ＡとＢによって、そのような評価前提が共通基盤として文脈上の共通認識になっていることがわかる。例 19 では単なる比較判断文と言えるが、例 19 － 1 のムシロが入った場合、このムシロは話し相手（他者）が「教育者だ」と

した評価に向けられており、相手の評価を否定する働きをしている。他者の評価・判断が否定する「前提」として文脈上設定されており（設定されていると暗示され）、しかも、その評価は、共通認識を基盤にしているものであるから「間違い」というものではないものの、一方、「前提」となっている相手の意見を否定して、それとは見方が異なる特異な視点からの評価（多くの場合、より鋭い、あるいは、より極端な評価や判断）がなされるため、そこに、相手（や聞き手・読み手）側に「意外」な印象を与えることになる。そのような特異で特徴的な評価が、それよりは一般的な評価となっている「前提」に比して「予想意外性」を付与する効果をもっていると言える。以下の事例も類似例である。

（例 20）今回の出来事は、事故というより人災だ。

（例 20 － 1）今回の出来事は、事故というより**ムシロ**人災だ。

（例 21）彼は政治家というより政治屋だ。

（例 21 － 1）彼は政治家というより**ムシロ**政治屋だ。

例 20 では、何らかの事故という共通認識があるが、単なる偶然的アクシデントとしての事故ではなく、自然発生的面を否定した「人災」という判断であるため、そこに「意外性」が生まれていると言える。

例 21 では、対話者間には、彼が政治家だという共通認識が前提にあるが、聞き手（相手）の一般的評価でもあろう聞き手（相手）の政治家をムシロによって否定し、異なる極端な評価（ここでは悪い評価を持つ「政治屋」であるが、例えば、「行政事務官だ」とか「田舎役人だ」など特異な別の評価でもよい）を与えることによって、「予想意外」が発生している。

これらの典型例では、比較項Ａにおける教育者、事故、政治家など、文脈上より一般的と見える評価・判断が、前提として設定され、それを否定するかたちで提示されている学者、人災、政治屋などが、より限定された評価として提示されており、それが「意外性」を生み出す構図になっている。このパターンは、上記５章でみた「ウ　ＡよりＢが妥当だ・適当だと判断する・評価する」の場合に多く認められる。

6.4　比較項Ａと比較項Ｂに極端な相違があるか関連性がない場合――比較項Ａが否定される前提となっている場合――

（例 22）団体でぞろぞろ行くぐらいなら一人で行ったほうがいい。

（例 22 － 1）団体でぞろぞろ行くぐらいなら**ムシロ**一人で行ったほうがいい。

例 22 の例文では、比較項Ａを否定しているが、比較項Ｂも否定的選択であるようには思われない。例 22 － 1 の例文では、団体で行く前提がある。比較項Ａに対し、比較項Ｂも必ずしも望ましい選択ではないが、どちらか一方を選ばなければならないとすれば、比較項Ｂを選ぶと言っている。場面によっては、「行く」事自体を否定している場合も考えられ、極端な例を持ち出していると言っても良く「予想意外性」がある。

例えば、この旅行が修学旅行であった場合。団体で行動することに意義があるわけだから、「一人で行く」選択はこの行動自体を否定していることになる。次に述べる「死んだ方がいい」のような極端な選択に近づいて行く。

（例 23）彼と仲直りするくらいなら死んだほうがましだ。

（例 23 － 1）彼と仲直りするくらいなら**ムシロ**死んだほうがましだ。

例 23 では、死ぬという極端な例を持ち出して比較項Ａを強く感情的に否定している。例 23 － 1 では、「死ぬ」ということが妥当であるという選択はない。つまり、「死ぬ」のような 100％否定されるべき比較項Ｂの場合、前提は必要でない。さらに比較項Ａ、比較項Ｂの関連性もない。ムシロが加わることにより、極端な例を持ち出したにも関わらず、幾分客観性を持っているように感じられる。「死ぬ」という選択が「予想意外性」を持っているのは言うまでもない。

これらのパターンは、前述の「エ　ＡよりＢを、まだマシだとして選択する。」という主観的選択の場合に顕著に認められるように思われる。

以上、比較項Ａと比較項Ｂの意味関係を 4 つのパターンに分類し、予想意外性が認められるかどうか検証し、「予想意外性」が現れる意味的論理構成を検討してみた。

予想される回答は、一般常識・共通認識、あるいはまた、前提として文脈や他者の評価の中に存在し、比較項Ｂは、それらとは違うものとして選択され、それを否定するかたちで提示されていた。

7. カエッテ、イッソとの比較

陳述副詞の中でムシロと同様に、比較・選択・評価・判断を表すカエッテ・イッソの両方で、ムシロに置き換え可能な例を挙げてムシロの「予想意外性」をみてみたい。

7.1　カエッテ

カエッテの意味としては、比較・選択・評価・判断・予期に反して、がある。

カエッテは、語源的に「返って」（翻って）つまり「反対に」の意味を持つ。それゆえ、基本的に、単に通常の客観的判断や予期に反するだけでなく、予想とは反対の事態（正反対、ないし、それに相当）の場合には、次のように、ムシロと同様に使用することができる。

（例 24）渋滞の時は車より歩く方が**ムシロ**／**カエッテ**むしろ早い。（車と徒歩とでの遅速の相違）

（例 25）8 月より 9 月のほうが**ムシロ**／**カエッテ**暑かった。（夏の 8 月と秋の 9 月での気温の相違）

（例 26）病人の方が健康なあなたより**ムシロ／カエッテ**しっかりしている。（健常者と病人とでの健康度合いの相違）

（例 27）宴会の料理は自分で作ると仕出しを頼むより**ムシロ／カエッテ**高くつくことがある。（外注料理と手作り料理とでの金額の相違）

一方、比較する 2 つ以上の事柄が「反対」の意味を含意しない場合、例えば「リンゴより**ムシロ**ミカンのほうが好きだ」の場合のリンゴとミカンに対する嗜好の差のように、客観的には優劣を付けがたい内容に対する、主観的相対的度合いの比較しか表していない場合には、「反対」の意味がないのでムシロは使えても、カエッテは使えない。この点が、カエッテとムシロの大きな相違である。

なお、ムシロ・カエッテが、置き換えられる文ではムシロを使った文に比べカエッテを使った文の方が、比較項Ａ・比較項Ｂの程度の差が大きいと感じられる。それは、「返って」という語源にある「反対」の意味が強い（明確である）ためと考えられる。その意味で、ムシロよりカエッテの方が「予想意外性」がより強く表現されると解釈される。

7.2　イッソ

イッソには、比較・選択・評価・判断などの意味があるが、そのうちの「選択」は必修要素ではない。

イッソでつながれた比較項Ａ・比較項Ｂが、いずれも自分が望む状況ではないときに、思い切って今の方向と違う事を選ぶ。極端な選択、または、本来は望ましくないほうを選ぶ時、好ましい事をあきらめて投げやりな気持ちを表す時に使う。その点では「どうせなら〜」という意味合いも含まれる。

（例 28）団体でぞろぞろ歩くくらいなら、**イッソ／ムシロ**一人で行こう。

（例 29）治療でこんなに苦しむのなら**イッソ／ムシロ**楽になりたい。

『副詞用法』p.59 － 1

（例 30）毎日口けんかするくらいなら、**イッソ／ムシロ**別れてしまおう。

例 30 で見ると、イッソをムシロに置き換えた文では、「別れない」選択が少し聞き手の選択肢としてあるように感じられる。ムシロが比較した上での選択であるからである。そのため、イッソのような投げやりな感じは少ない。

このような相違に、「予想意外性」の差も表れている。ムシロの方が、思慮した上での比較選択であるのに対して、イッソは「思い切った選択」「極端な選択」「他を諦めた選択」であるので、思ってもいないような想定以上の、意外な選択もその射程範囲となってくる。そのような「想定以上の」という意味合いは、イッソの語源に「一層」が比定されていることとも（『岩波国語辞典』など）関係しているかもしれない。つまり、イッソでは「予想意外性」が大きくなるが、一方のムシロではそれよりも意外性が小さくなっていると解釈される。

（例 31）このまま生きていくより、**イッソ／ムシロ**死にたい。

例 31 のように、「死ぬ」という選択は「予想意外性」がある。イッソ、ムシロ両方とも「死ぬ」という最も極端な選択のほうがまだ好ましいという判断を表し、そこから逆に、このまま生きていくことがいやだという話者の意志を表しているのだが、ムシロの使われた文には、客観性が感じられイッソの使われた文に比べ冷静に状況を見ているようである。それに対して、イッソは、「思い切って大きく転換をはかって、物事を解決する」表現となっている。イッソは、それだけ比較項Ａと比較項Ｂとの間の相違を大きなものととらえた場合の（極端に反する事態と把握した場合の）表現ということができよう。それだけ、「予想意外性」が大きくなっているのである。

以上、ムシロ・カエッテの置き換えられる文では、カエッテを使った文の方が、比較項Ａ・比較項Ｂの程度の差が大きいと感じられる。ムシロの「予想意外性」は、単なる比較に見える程度のわずかな「予想意外性」から、カエッテが誘導する正反対の「予想意外性」まで幅があった。これは、カエッテ・イッソには見られない性質ではないだろうか。一方、ムシロ・イッソの置き換えられる文では、イッソが使われている文のほうが比較項Ａと比較項Ｂとの間の相違が大きいと感じられて、ムシロより予想意外性が大きいといえる。

予想意外性の度合い　ムシロ＜カエッテ＜イッソ

8. ムシロを使用することによる効果

6 章までに、ムシロの「予想意外性」という働きを見てきた。ここで少し視点を変えて見てみると、ムシロの持つこの特性は、ムシロをあえて使うことによって、話者の選択が聞き手の予想しているものとは違う、ということを暗示する効果を生み出す効果をもつ、と考えることができるように、思われる。例えば、次例を比較してみていただきたい。

（例 32）東京と大阪では、東京のほうがきれいだ。

（例 33）東京と大阪では、大阪のほうがきれいだ。

（例 34）東京と大阪では、**ムシロ**大阪のほうがきれいだ。

（例 35）東京と大阪では、**カエッテ**大阪のほうがきれいだ。

ムシロのない文でも、「～の方が」があるので「比較・選択・評価・判断」の意味はある。では、ムシロの入った文とはどのように違うだろうか。ムシロを入れることは、何らかの「前提」が生み出されることでもあった。上記の例ではムシロによって「前提」が作り出されているのではなかろうか。つまり、ムシロにより「前提」が強調されてくると考えられる。たとえ文脈上の前提がなくとも、ムシロの使用によって、新しい前提と共通認識がその場で意識されるようになると、考えられる。ムシロを言うことで、意外感を持たせる効果がある。

ムシロを入れることは、「前提」「共通認識」を添加することでもあると言えよう。

9. 結論

ムシロはこれまで辞典や先行研究の中で「比較・選択・評価・判断」の 4 つの働きをするとされてきたが、これら 4 つのいずれの意味の場合でも、その基礎として「予想意外性」の意味をあらかじめ持っていることをみた。

つまり、比較項Ａと比較項Ｂを「比較・選択・評価・判断」する上でまず予想意外な印象を相手に与えているということだ。

結論をまとめると、以下の通りである。

1. ムシロの使われる文には必ず「一般常識、共通認識、前提」のどれかがある。一般常識・共通認識が「前提」に代わる役割を果たしているのであり、具体的な「前提」が示されなくとも「予想意外性」を生みだすことが出来た。

2. さらに、すでに「予想意外性」があると解釈されているカエッテ・イッソと比較して、これらがムシロに置き換えられる場合も見てきた。いずれも、ムシロに置き換えた場合には「予想意外性」が低くなるものの、ほとんどの場合置き換え可能であることが解かった。やはり、ムシロにはこれまで言われていた比較・選択・評価・判断に加えて、「予想意外性」があるということになる。

3. 予想意外性の点から見れば、予想意外性の度合いの相違は、概略次のように段階的であると考えられた。

ムシロ＜カエッテ＜イッソ

しかし、ムシロの「予想意外性」は、単なる比較に見える程度のわずかな「予想意外性」から、カエッテが誘導する正反対の「予想意外性」まで幅があった。これは、カエッテ・イッソには見られない性質である。ムシロは比較項Ａ・比較項Ｂの意味関係の差がない場合から極端に差がある場合まで使うことができ、かつ、「予想意外性」を持っている。

4. 反対に、カエッテとイッソは、比較項Ａ・比較項Ｂの意味関係に差がない場合や差が少ない場合には使えない。比較項Ａ・比較項Ｂの意味関係に極端な差があり、思い切った選択をするような意味合いではムシロは相応しくないのである。

比較項Ａの後にムシロと続けただけでは、比較項Ｂに比較項Ａとどの程度差のある比較項Ｂが続くのか予想できない。カエッテとイッソの場合は、ある程度以上の差のある選択がされることは予想できるのだ。この点もムシロとカエッテ・イッソとの違いである。『副詞用法』の 7）の現代語用法に見られるように、ムシロを汎用して相手の出方を探るような使い方をされるのも、ムシロの上に述べたような性質によるものではないかと考える。この点については、さらに検証しなければならない。

「予想意外性」という表現に、言葉の上で抵抗のある方がいるかもしれないが、前提となっている一般常識及び共通認識があることまた、ムシロにはそれに反する結果を導き出している働きがあることは認められると思う。

今後は、長田（1983）「基準Ａ」（比較項Ａ）とムシロとの間に出現している「関係を示唆する表現」（Ａというよりは　ムシロＢ、Ａというよりも　むしろＢ、Ａよりも　ムシロＢ、Ａ却って　ムシロＢ、Ａというか　ムシロＢ、Ａどころか　ムシロＢ、Ａそればかりか　ムシロＢ、Ａいや　ムシロＢ）などについても詳しく分析し、ムシロの持つ「予想意外性」の幅について検証したい。

さらに、陳述副詞カエッテ・イッソ・ドチラカトイエバ[22]などとの詳細な比較もさらに深化させて、比較・選択の副詞の体系的研究を進めていきたい。

注

1）　ある社会で、人々の間に広く承認され、当然持っているはずの知識や判断力。

2）　共通認識を狭いコミュニティの中で通用する常識と定義し、一般常識と区別する。

3）　西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫編（1963）『岩波国語辞典』、第７版（2009）を使用、岩波書店

4）　山田忠雄（主幹）・柴田武・酒井憲時二・倉持保男・山田明雄（1972）『新明解国語辞典』、第６版（2005）を使用、三省堂

5）　松村明編（1998）『大辞林』、第３版（2006）を使用、三省堂

6）　日本国語大辞典二版編集委員会・小学館国語辞典編集部（2001）『日本国語大辞典二版第二巻』小学館

7）　藤原与一・磯貝英夫・室山敏昭編（1985）『表現類語辞典』東京堂出版

8）　小学館辞典編集部編（1994）『類語例解辞典』、第１版、小学館

9）　飛田良文・浅田秀子（1995）『現代副詞用法辞典』東京堂出版

10）　主として会話文で用いられる「むしろ」7）の用法については別途考察の余地を残す。

11）　砂川有里子・駒田聡・下田美津子・鈴木睦・筒井佐代・蓮沼昭子・ベケシュ　アンドレイ・森本順子（1998）『日本語文型辞典』、第14版（2007）を使用、くろしお出版　pp.38-39「いっそ」、70「かえって」、pp.567-568「むしろ」

12）　市川孝（1976）『岩波講座　日本語６　文法Ｉ』

13）　森田良行（1977）『基礎日本語辞典1』初版、角川書店（森田良行（1989）『基礎日本語辞典』、初版も参照）

14）　工藤浩（1977）「限定副詞の機能」『国語学と国語史（松村明教授還暦記念）』明治書院　pp.969-986

15）　長田久男（1983）「注釈の誘導副詞『むしろ』の意義記述」日本文学伝統と近代 pp.788-804

16）　池谷清美（1988）「『かえって』の意味について」Sophia International Review10 pp.30-33

17）　国立国語研究所（1991）『副詞の意味と用法』大蔵省印刷局

18）　日本語教育　御用例研究会（丸岡・福島）（1997）『類似表現の使い分けと指導法』アルク

p.41-47

19）　安部朋世（2011）「ムシロ・ドチラカトイエバ・カエッテの分析」千葉大学教育学部研究紀要、第 59 巻、pp.241-245

20）　趙愛淑（2011）「韓日語副詞『むしろ』와『오히려』의 意味研究」日本研究　第 48 號、pp.263-281

21）　庄鳳英（2000）「『むしろ』、『かえって』和『いっそ』之异同」日語学集　pp.51-55

22）　申在景（2014. 3）「比較・選択の陳述副詞『ドチラカトイエバ』―中立・非中立の 2 つの用法―」学習院大学・国語国文学会誌 57 号、pp.73-90

参考文献

安部朋世（2011）「ムシロ・ドチラカトイエバ・カエッテの分析」千葉大学教育学部研究紀要、第 59 巻、pp.241-245

池谷清美（1988）「『かえって』の意味について」Sophia International Review10 pp.30-33

市川孝（1976）『岩波講座　日本語 6　文法 I 』

工藤浩（1977）「限定副詞の機能」『国語学と国語史（松村明教授還暦記念）』明治書院　pp.969-986

国立国語研究所（1991）『副詞の意味と用法』大蔵省印刷局

庄鳳英（2000）「『むしろ』、『かえって』和『いっそ』之异同」日語学集 pp.51-55

申在景（2014. 3）「比較・選択の陳述副詞『ドチラカトイエバ』―中立・非中立の 2 つの用法―」学習院大学・国語国文学会誌 57 号、pp.73-90

趙愛淑（2011）「韓日語副詞『むしろ』와『오히려』의 意味研究」日本研究　第 48 號、pp.263-281

長田久男（1983）「注釈の誘導副詞『むしろ』の意義記述」日本文学伝統と近代 7、pp.788-804

日本語教育誤用例研究会（1997）『類似表現の使い分けと指導法』、2 刷（1998）を使用、アルク pp.41-47

渡辺実（1957）「副用語・付属語」『日本文法講座 1』明治書院

辞典

小学館辞典編集部編集（1985）『現代国語例解辞典小学館』、第 4 版（2006）を使用、小学館

小学館辞典編集部編（1994）『類語例解辞典』、第 1 版、小学館

砂川有里子・駒田聡・下田美津子・鈴木睦・筒井佐代・蓮沼昭子・ベケシュ アンドレイ・森本順子（1998）『日本語文型辞典』、第 14 版（2007）を使用、くろしお出版 pp.38-39「いっそ」、70「かえって」、pp.567-568「むしろ」

西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫編（1963）『岩波国語辞典』、第 7 版（2009）を使用、岩波書店

日本国語大辞典二版編集委員会・小学館国語辞典編集部（2001）『日本国語大辞典二版第二巻』小学館

飛田良文・浅田秀子（1995）『現代副詞用法辞典』東京堂出版

飛田良文・遠藤好英・加藤正信・佐藤武義・蜂谷清人・前田富祺（編）（2008）『日本語学研究事典』、明治書院

藤原与一・磯貝英夫・室山敏昭編（1985）『表現類語辞典』東京堂出版

松村明編（1998）『大辞林』、第 3 版（2006）を使用、三省堂

森田良行（1977）『基礎日本語辞典 1』初版、角川書店（森田良行（1989）『基礎日本語辞典』、

初版も参照）
山田忠雄（主幹）・柴田武・酒井憲時二・倉持保男・山田明雄（1972）『新明解国語辞典』、第 6 版（2005）を使用、三省堂

用例出典（新聞は除く）

『サヨナライツカ』―辻仁成（2001）初版　世界文化社、p.46
『猫道楽』長野まゆみ（2002）初出『文垂』二〇〇二年夏号猫道楽、p.122
『波の上の魔術師』石田衣良（2001）文芸春秋、p.58
『ロマノフ王朝の秘宝』典厩五郎（1995）

付記

本稿は、2011 年度に学習院大学大学院人文科学研究科に提出した修士論文の一部をもとにまとめ直したものである。修正するにあたり指導担当である安部清哉先生の御助言を受けたところがある。なお、次の口頭発表を経ている。ご質問やご教授を下さった方々に感謝申し上げる。

申在景（2011）「『むしろ』の予想意外性について」、第 176 回「青葉のことば会」2011 年 11 月 19 日（土曜）於・学習院大学）

例文の比較の際、助言を惜しまず、また、日本語を点検してくださった寺脇睦美さんと、御指導を戴いた安部清哉先生に改めて深謝申し上げる。

ENGLISH SUMMARY

“Unexpectedness” of “mushiro”

SHIN Jaekyung

“Mushiro” is an adverb that most broadly demonstrates differences of value, situation, ability, range, and degree, in comparison with declaratory adverbs: “kaette”, and “isso”.

From the conventional description and studies of “mushiro”, it is found that its meaning has four elements, which are “comparison, selection, evaluation, and decision”. However, other possible meanings besides these four have not been demonstrated.

This study includes “unexpectedness”, which embodies a sense of “rather”, as an additional meaning of “mushiro”, with the previous four connotations of “comparison, selection, evaluation, and decision”.

First, this article examines whether “mushiro”, when used in a comparison of A and B, has the significance of “unexpectedness”. It is studied whether it is similar with the usage of “rather” in sentences by focusing on the comparison between A and B（difference of value, situation, ability, range, and degree）.

Furthermore, I inductively proved that “mushiro has a meaning of unexpectedness”, compared with the meanings of “kaette” and “isso”, which have already been verified in preceding studies to be the opposite of unexpectedness.

As a result, I found out that any sentence containing “mushiro” has an “unexpectedness” meaning involved by examining a comparison of A and B in sentences which contain at least a connotation of “general knowledge, common sense and premise”.

Key Words: comparision, unexpectedness, general knowledge, common sense, premise